



Challenge Your World

— Study Abroad —

(留学ガイドブック)



2012

日本大学国際関係学部
日本大学短期大学部(三島)

各留学プログラムは、外務省の海外安全情報に基づき、国際紛争、テロ、災害、及び人為的、不慮不可抗力による事故等の発生により、渡航または現地での滞在に危険があると判断された時は、募集並びに派遣を中止または途中で帰国させる場合があります。



そこに夢を描こう





夢の実現に向けて



～ は じ め に ～

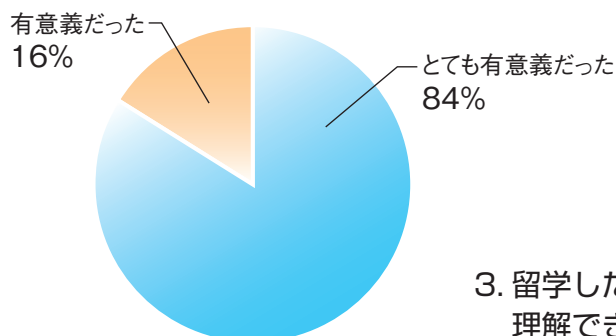
「留学」とは単なる語学の修得ではなく、その国の歴史や文化・風土を肌で感じ、その世界に飛び込んでいくことです。そこで得たことは人生での大きな経験となり、人間力の向上に大いに役立つものです。留学のために半年から1年という中長期間の時間を確保することができるのも、この学生時代しかないのではないのでしょうか。日本人の海外留学生数が減少している昨今、是非皆さんには積極的に留学にチャレンジしていただき、海外の大学で大いに学び、視野を広げ、帰国後もその貴重な留学経験を社会でしっかりと生かしていただきたいと願っております。

本学部では留学支援のための国際交流プログラムを用意しております。最短6ヵ月以上最長2年までの期間、休学することなく留学することが可能です。最長1年までの場合は、通常どおり4年間での卒業も可能となります。

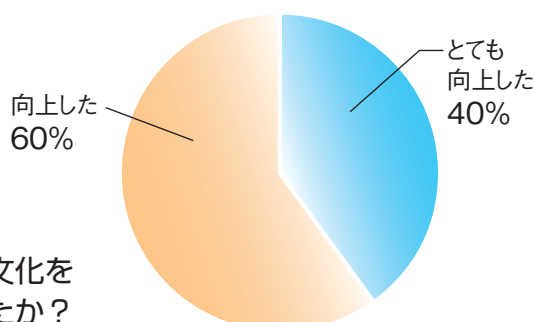
本冊子後半に掲載している昨年度留学した先輩方の報告書（国際交流体験記）と併せてご覧ください。

留学後アンケート結果

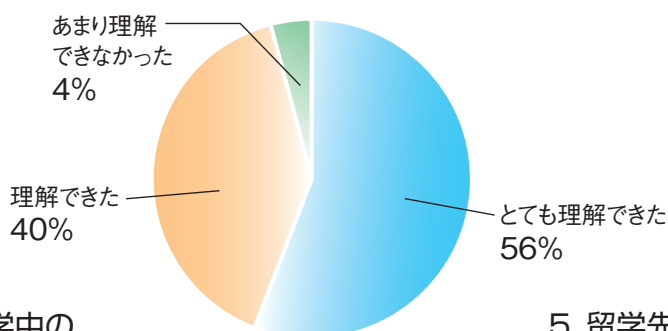
1. 留学はどうでしたか？



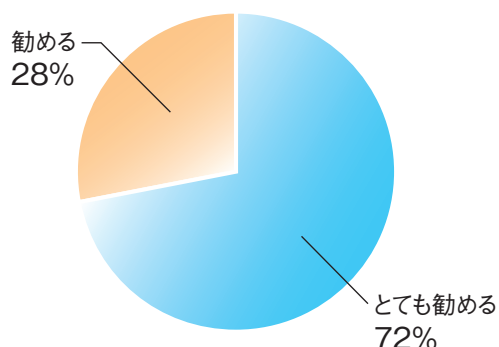
2. 語学力は向上しましたか？



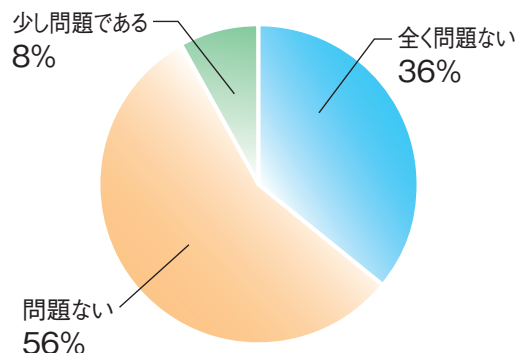
3. 留学した国の文化を理解できましたか？



4. 後輩へ大学在学中の留学を勧奨しますか？



5. 留学先の治安はどうでしたか？



目 次

1 留学について

◆国際関係学部派遣交換留学・中期留学 募集大学紹介	6
◆派遣交換留学	7
◆中期留学	9
◆ティーチング・インターンシップ・プログラム	10
◆ジョイント・ディグリー・プログラム	11
◆私費留学	11

2 国際交流体験記の紹介について

◆交換留学（派遣）

本部派遣	北京大学（中国）	13
	ストックホルム大学（スウェーデン）	14
学部派遣	モンタナ州立大学（アメリカ）	15
	モンタナ大学（アメリカ）＜ ISEP ＞	16
	インディアナ州立大学（アメリカ）＜ ISEP ＞	17

◆交換留学（受入れ）

学部受入	ストーニーブルック大学（アメリカ）	18
	カトリック大学（韓国）	19
	ロヨラ大学（アメリカ）＜ ISEP ＞	20

◆中期留学

	セント・ノーバート・カレッジ（アメリカ）	21
	ゴア大学（インド）	23
	北京大学国際関係学院（中国）	25

◆ティーチング・インターンシップ・プログラム

	Devon Intermediate School（ニュージーランド）	27
	Discovery School of Lancaster（アメリカ）	28

◆私費留学

	西カトリック大学付属語学学校（フランス）	29
	清華大学（中国）	30

◆短期海外研修

	ハワイ大学（アメリカ）	31
	北京大学（中国）	32
	WITT（ニュージーランド）	33

◆教員の交流

ノルテ大学 (コロンビア)	34
◆留学を終えた先輩方の一言	35

1 留学について

国際関係学部派遣交換留学・中期留学 募集大学紹介



セント・ノーバート・カレッジ

1898年に設立されたローマカトリック系の4年制大学で、総学生数は約2,000人の小規模大学である。全学生の約7割がウィスコンシン州内から来ている典型的な地域密着型の大学で、留学生の全体における割合は3%と少ない。しかし、小規模ながらも総合大学であり、アメリカ中西部の私立大学の中ではトップ3にランキングされており、講義の内容、教員陣、施設等は充実している。リベラルアーツ、科学、ビジネス、教育学の分野で学位を提供しており、特に経営学、国際ビジネス学、コミュニケーション、数学、科学、生物学の専攻は人気が高い。



ニューヨーク州立ストーニーブルック大学

ニューヨーク市より東に100km程の距離にあるロングアイランドにあり、1,100エーカー(約135万坪)の広大なキャンパスに22,000名の学生が学んでいる。学部としては、人文・科学部、工学・応用科学部、医学部など10学部を擁している。ストーニーブルック大学は、1957年に設立された比較的新しい州立大学であるが、2名のノーベル賞受賞者をはじめとして、広範囲の学問分野において世界的に著名な研究者、学者を数多く抱えており、アメリカの公立大学の中でもトップクラスの大学に数えられている。



モンタナ州立大学

ロッキー山脈を望む標高1,500メートルのモンタナ州ボーズマン市にある学生数12,000名を擁するモンタナ州最大の総合大学である。国より受け取る年間の研究助成費は1億ドルを越え、全米的にも高い評価を得ているリサーチ大学のひとつであり、リサーチ大学としては2006年カーネギー財団によりエール大学、ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学に肩を並べるトップ・レベルの大学として格付けされている。広大なキャンパスには文理学部、ビジネス学部、工学部、農学部等8学部の校舎が点在している。



マッコーリー大学

シドニーから北西に18キロ、住宅地とテクノロジーパークとの間に広大なキャンパスが広がっている。1967年に創立され、ニューサウスウェルズ州の中でも大規模な大学のひとつであり、特別に学部は設置されておらず、大学全体がひとつの学部として機能するシステムになっている。また、マッコーリー大学は留学生を多数受け入れる大学としても知られ、その数は7,000人にも上る。マッコーリー大学のポリシーは、学生と講師ができるだけ多くのコミュニケーションをもつこととしており、あちこちで学生と教授が気軽に話をしている光景が見られる。



WITT(Western Institute of Technology at Taranaki)

ニュージーランド北島のウェストコースト、オークランドとウェリントンの中に位置するニュープリマス市にある国立総合専門学校で、学術、職業訓練の両方のプログラムを提供する高等教育機関である。学生数は約5,000人おり、アート&メディア、ビジネス&コンピューター、看護&健康、マオリ研究などの7つの学部があり、各学部は幅広いコースを提供している。ニュープリマス市は、安全・クリーンな都市で、勉強から離れた余暇時には、スキー、サーフィン、釣りまたは数々の映画の撮影がされた壮大な自然環境を楽しむことができる。



ゴア大学

インドの西海岸に位置するゴア州にある大学で、起源は古く、ボンベイ大学大学院センターが設立された1966年までさかのぼる。1985年に社会・経済的な発展を後押しする役割を期待されながら、ゴア大学はボンベイ大学大学院研究センターの協力の下、創立された。以来、着実に規模を拡大し、現在は24の大学院研究科を有している。教職員、男女学生、特別研究員のための宿泊施設をもち、キャンパス内には銀行、ゲストハウス、郵便局、ショッピングモール等の施設もある。



北京大学

1898年に創設された中国初の国立総合大学。1912年に「京師大学堂」から「北京大学」に改称、2000年に北京医科大学と合併。中国名門大学の一つで、特に人文系、基礎理料系においては中国最高峰と言われている。外国留学生に対する中国語教育にも力をいれている。キャンパス内には留学生宿舍、ゲストハウスをはじめ、郵便局、銀行、スーパーマーケット、書店、売店などもあり、学校全体が1つの都市機能を有している。また大学や研究機関、ハイテク企業が多く集まる中国のシリコンバレーとも呼ばれる中関村に位置し、落ち着いた環境の中で留学生活を送ることができる。



静宜大学

台湾台中市沙鹿区にある私立大学。英語名は Providence University、カトリック系共学大学。アメリカ合衆国インディアナ州にある American congregation of the Sisters of Providence of St. Mary-of-the-Woods によって創立、大学の始まりは1920年までさかのぼる。キリスト教の教義である愛と慈悲と正義の教えのもと、学生が社会に良い変化を効果的にもたらせるように学問の分野において世界観や生涯の価値観、研究能力、さらには批判的に物事をとらえる力の向上のために学生を導く努力をしている。

派遣交換留学

派遣交換留学とは日本大学本部及び国際関係学部が交換留学に関する協定・覚書・合意書を締結している大学へ学生を派遣する制度です。留学期間は1年間で、「日本大学本部派遣交換留学」と「国際関係学部派遣交換留学」の2種類があります。

大学・学部の代表として選ばれた者だけが交換留学生として提携校に派遣されます。提携校の授業料は免除となり、その他奨学金の受給もあります。留学中は現地の学生とともに正規の授業を受け、大学・学部と提携校を結ぶ友好親善大使として留学期間を過ごすことにもなります。派遣交換留学生だけに与えられたすばらしい機会です。興味のある方は是非挑戦してください。

日本大学本部派遣交換留学の詳細は、日本大学本部のホームページ（※1）で確認してください。国際関係学部派遣交換留学の詳細については下記を参照してください。

その他、ISEP プログラム（※2）を利用し、提携校以外の ISEP 加盟校へ交換留学生として留学できる場合もあります。

※1 日本大学本部派遣交換留学についての詳細

(http://www.nihon-u.ac.jp/campus_life/international/study_abroad/index.html)

※2 ISEP(International Student Exchange Program) について (<http://www.isep.org/>)

ISEP とは米国で創設された米国内外の加盟校間で学生留学を推進する非営利法人の全世界的な大学連合組織（コンソーシアム）です。ISEP を仲介しての交換留学であるため、日本大学本部派遣・学部派遣交換留学とは仕組が異なります。興味のある学生は国際教育センターにお問い合わせください。



平成25年度 募集概要

大学名称		セント・ノーバート・カレッジ	ストーニーブルック大学	モンタナ州立大学	WITT	マッコーリ大学	静宜大学
所在地 URL		アメリカ ウィスコンシン州 http://www.snc.edu/	アメリカ ニューヨーク州 http://www.sunysb.edu/	アメリカ モンタナ州 http://www.montana.edu	ニュージーランド ニュープリマス市 http://www.witt.ac.nz/	オーストラリア ニューサウスウェルズ州 http://www.mq.edu.au/	台湾 台中県 http://web.pu.edu.tw
派遣期間		平成 25 年 1 月～平成 25 年 12 月			平成 25 年 2 月～平成 25 年 12 月		平成 25 年 2 月 ～平成 26 年 1 月
人 数		各 1 名				2 名	1 名
応募要件	TOEFL® -ITP ※	550 点以上	530 点以上	500 点以上	 88 点以上 (PBT 換算 570 点)		中国語及び中国 文化に一定の関 心を有すること
	TOEFL® -iBT ※	79 点以上	71 点以上	61 点以上			
	GPA	(目安) 2.7 以上	3.0 以上	(目安) 2.7 以上			
応募資格		①日本大学国際関係学部在籍する学業成績優秀な 2 年生以上で、留学期間中も引き続き在籍できる者 ②上記派遣条件を満たした者					
提出書類		以下書類（各 1 通）を揃え、申込締切日までに国際教育センターへ提出 ①派遣交換留学申込書 ②本学部の成績証明書（和文） ③パスポートの写し ④志望動機（Word を使用し英文（静宜大学は日本語）で A4 用紙 2 枚以内） ⑤ TOEFL® スコアの写し（ITP レベルⅡは不可）（静宜大学は不要）					
応 募 ガイダンス		平成 24 年 4 月中旬予定 詳細は掲示参照 ※選考方法、単位認定等について詳細を説明するので、希望者は必ず参加すること					
申込締切日		平成 24 年 5 月 18 日（金）16:00 まで（厳守）					
留学経費等		※平成 23 年度参考（アメリカ） ・寮費・食費・テキスト代（¥80,000 × 10 ヶ月） ・往路航空券・空港税・燃油サーチャージ他 ・復路航空券・空港税・燃油サーチャージ他 ・夏季休暇中の滞在費・食事 ・お小遣い（¥40,000 × 10 ヶ月） ¥800,000 ¥150,000 ¥100,000 ¥300,000 ¥400,000 ¥1,750,000 ・派遣先大学の年間授業料を免除する。 ・日本大学国際関係学部の年間授業料を半額免除する。 ・日本大学国際関係学部の施設設備資金を徴収しない。 ・日本大学三島後援会海外交流奨学金給付規定により奨学金を支給する。 ・派遣先大学留学中の滞在費用は個人負担とする。					
宿 舎		派遣先大学 学生寮					
単位認定		帰国後に留学先で修得した科目について、本人が本学部への科目への単位互換の申請をします。その後、本学部で 1 科目ごと単位互換の可否を判定します。ただし、申請した科目が認められないことがありますので、十分注意が必要です。					

※ TOEFL® スコアについては平成 22 年 6 月以降に取得したものとする。

中 期 留 学

中期留学とは国際関係学部が主催する約半年間の留学プログラムで、国際関係学部と提携している下記大学の付属語学学校等へ留学します。

留学先では、国際関係学部生用に開講された授業を集中的に受講することになりますが、セント・ノーバート・カレッジにおいては、語学力次第で正規課程授業を受講することも可能です。正規課程授業料は免除となります。また、留学期間は派遣大学の学生寮に滞在することになり、安心した留学環境において、勉学に励むことができます。まずは約半年間の中期留学で語学力をスキルアップさせ、帰国後、派遣交換留学に挑戦することも可能です。世界の一流大学キャンパスで半年間留学できる貴重な機会です。

平成24年度 募集概要

大学名称		セント・ノーバート・カレッジ		ゴア大学		北京大学			
所 在 地 URL		アメリカ ウィスコンシン州 http://www.snc.edu/		インド ゴア州 http://www.unigoa.ac.in/		中国 北京市 http://www.pku.edu.cn/			
派遣期間		平成 24 年 8 月下旬～平成 25 年 3 月中旬		平成 24 年 9 月下旬～平成 25 年 3 月上旬		平成 25 年 2 月下旬～平成 25 年 7 月上旬 (※平成 25 年度留学扱い)			
募集人数		20 名		12 名		10 名以上			
応募資格	留学時 学年	2 年～ 4 年 (但し、4 年次の学生については要相談)				3 年～ 4 年			
	その他	TOEFL-ITP400 点以上、-iBT32 点以上		TOEFL-ITP400 点以上、-iBT32 点以上 ※留学出発までには TOEFL®-ITP450 点以上を取得することを目標とする。		第 1 外国語または第 2 外国語で中国語を履修していること。または同等レベルの語学力を有すること。(母国が中国語である場合を除く)			
研修内容		① 集中英語コース (ESL) 及び CIE コース	対象者：TOEFL® ITP のスコアが 400 点以上 550 点未満の学生		オリエンテーション及び英語強化トレーニング(計 150 時間)、文化・文学・歴史・哲学 (計 120 時間)、政治・経済・経営 (計 150 時間)、ジェンダー・移民・食物・観光等の社会問題 (計 120 時間) を履修する。インド国内研修旅行 (2 回に分け計 8 泊 10 日)		国際研究とグローバル化 (国際関係とグローバル化) など、1 科目 90 分 × 30 回を計 6 科目履修する。		
		② 秋学期学部授業の正規履修及び CIE コース (正規課程授業料は全額免除)	対象者：所定の期日までに TOEFL®-ITP 550 (iBT79) 点以上を取得した学生						
		※ CIE コース：Center for International Education 日大生用に開講する講義形式の授業 (平成 25 年 1 月から 3 月まで)							
留学経費 (前年度参考)		①	②		授 業 料	約 \$3,800	授 業 料	約 13,600 円	
		ESL コース 授業料	約 \$3,825	秋学期 授業料	全額免除	寮費・食費・ その他の費用	約 \$3,000	寮費・食費・ その他の費用	約 12,800 円
		CIE コース 授業料	約 \$2,050	CIE コース 授業料	約 \$2,050	合 計	約 \$6,800	合 計	約 26,400 円
		寮費・食費・ その他	約 \$6,645	寮費・食費・ その他	約 \$6,645	※ 2012 年 2 月 28 日現在 1\$ ≒ 81 円		※ 2012 年 2 月 28 日現在 1 元 ≒ 13 円	
		合 計	約 \$12,520	合 計	約 \$8,695				
宿 舎		セント・ノーバート・カレッジ 学生寮		ゴア大学 ゲストハウス		北京大学 学生寮			
申込手続		次の書類 (各 1 通) を揃え、締切日までに国際教育センターへ提出							
		①中期留学申込書 (国際教育センターにて受領) ②パスポートの写し ③ TOEFL® のスコアの写し (ITP レベルⅡは不可) ※平成 22 年 5 月以降に取得したもの							
応 募 ガイダンス		平成 24 年 4 月中旬～下旬 詳細は掲示参照							
応募締切		未定 詳細は掲示にて確認ください。							
単位認定		「単位認定科目一覧」に基づき単位互換可能と認められた科目の範囲で講義内容・履修時間数・成績等を勘案した上、本学部の修得単位として認定する。							

ティーチング・インターンシップ・プログラム

国際交流の基本的目的のひとつに、国際的な状況下で実践家として活動でき、異なった文化価値が理解でき、あらゆる状況に柔軟に対応できる個人を養成する点があります。インターンシップ・プログラムは、この能力を学生たちに身に付けさせるために計画・実行されています。

プログラムは、学内事前研修と現地研修の2つから構成されています。学内事前研修は、現地の生徒に対する教授法を学び、日本文化や日本語を英語で説明できる能力を養成することに主眼を置いていきます。また、現地の文化的特徴なども学びます。

約8週間の現地研修では、本学と提携している海外の小・中学校（一部高校部門も含む）へ Teaching Intern 生として派遣され現地の生徒達に日本の言葉の初歩及び日本の文化を英語を使って教えます。日本文化や日本語を英語で教えるプロセスを通して、英語運用能力やコミュニケーション能力を養成し、更に、現地地域文化やその根底にある文化価値を実際の生活体験や教育体験から学び、柔軟さをもった価値観を育成します。（前年度派遣者数：8名）

平成24年度 募集概要

派遣先 (昨年度の例)	St. Nicholas School Gillet Elementary School / Middle School	Discovery School of Lancaster	Devon Intermediate School Highlands Intermediate School West End School	Belgian Gardens State School Ryan Catholic College
所在地	アメリカ ウィスコンシン州	アメリカ サウスカロライナ州	ニュージーランド ニュープリマス市	オーストラリア タウンズビル市
派遣期間	平成 25 年 2 月～平成 25 年 3 月（約 8 週間）			
人数	人数若干名（各 1 ～ 2 名）			
応募資格	①日本大学国際関係学部在籍する学業成績優秀な 2 年生以上で、留学期間中も引き続き在籍できる者 ② TOEFL® のスコアを提出できる者 ③教職課程または、「日本語教育能力検定試験」対策科目を履修していることが望ましい			
提出書類	以下書類（各 1 通）を揃え、申込締切日までに国際教育センターへ提出 ①ティーチング・インターンシップ・プログラム申込書 ②本学部の成績証明書（和文） ③パスポートの写し ④志望動機（Word を使用し英文で A4 用紙 2 枚以内） ⑤ TOEFL® スコアの写し（ITP レベルⅡは不可）			
応募 ガイダンス	平成 24 年 4 月中旬予定 詳細は掲示参照 ※選考方法、単位認定等について詳細を説明するので、希望者は必ず参加すること			
申込締切日	平成 24 年 5 月 18 日（金）16:00 まで（厳守）			
留学経費等	※平成 23 年度参考（オーストラリア） ・ホストファミリー手配及び費用（8 週間） ・往路航空券・空港税・燃油サーチャージ他 ・復路航空券・空港税・燃油サーチャージ他 ・お小遣い ￥172,000 ￥50,000 ￥50,000 ￥40,000 ￥312,000			
	・日本大学三島後援会海外交流奨学金給付規定により奨学金を支給する。 ・期間中の滞在費は全て個人負担とする。			
宿 舎	現地の家庭にホームステイ			

※ TOEFL® スコアについては平成 22 年 6 月以降に取得したものとします。

ジョイント・ディグリー・プログラム

ジョイント・ディグリー・プログラムとは、国際関係学部 に在籍する学生が3年次後期より2年間アメリカのニューヨーク州立ストーニーブルック大学に留学し、帰国後の半年間を国際関係学部にて修業すれば、最短5年間で双方の大学の学士号を取得することができるプログラムです。

募集ガイダンスは7月に行われ、年末から翌年の1月中旬が申込み期間となります。

応募者は8月の留学時に3年次の学生であることが条件であり、また申込み期間までに TOEFL®-iBT スコア、累積 GPA 等の留学応募条件を満たしていることが必要です。

留学先であるニューヨーク州立ストーニーブルック大学より入学許可を得た学生は国際教育センターを通じ速やかに所定の留学手続を取ると共に、留学出発までに留学アドバイザーと面談し留学中の履修計画につき十分に相談してください。

選考方法等の詳細は募集ガイダンスにて確認してください。

私 費 留 学

私費留学では、国際関係学部 に在籍する者が、以下の条件を満たし、事前に必要書類を提出して学部の承認を得た場合は、休学することなく海外の大学に留学することができます。

留学の期間は、6か月または1年間で、2年間を限度とします。留学の期間は1年間に限り修業年数に参入することができます。

留学を希望する者は、国際教育センターで私費留学に関する手続きの説明を受けて、各大学等への入学審査等の時間も考慮し、留学希望時期よりも最低でも半年前からは準備を始めるようにしてください。

留学先の入学審査等を済ませた後、最終的に国際関係学部へ提出する書類提出期限は、前期からの留学の場合は、1月中旬とし、後期からの留学の場合は6月中旬とします。詳細は国際教育センターにて確認してください。

(条件1) 外国の大学とは、外国における正規の高等教育機関で学位授与権を有するもの、またはその付属の教育機関を指します。

(条件2) 当該外国の大学で学修することが、教育上有益であると認められることが必要です。

(条件3) 当該学生が外国での教育を受け得るだけの能力を有していることが必要です。

2 国際交流体験記の紹介について

北京大学（中国）

留学期間：平成22年8月30日～平成23年7月21日

二度の北京留学

国際関係学科 4年
千田 誠志

大学に入学した頃、海外留学をするなんてことは考えた事もなかったのに、今私は二度目の留学報告書を書いている。

留学をするきっかけは何となくだった。2009年当時、私は大学二年生となっていた。そんな中、毎日同じような日々の繰り返しに飽きていた。このままではつまらない、大学生活をもっと充実にはできないかと考えていた頃、中期留学プログラムというのを知り、中国の北京大学への半年の留学プログラムに興味を持ったのだ。皆さん既知の人も多いと思うが、北京大学は伝統があり、日本でいう東京大学に相当する名門大学である。この中期留学に参加すれば大学生活が変わる。そう思い私は迷わず参加を決めた。2009年の留学については2010年度留学報告冊子を見てほしい。

日本に帰ってきた私は大学生活が変わった以上に、自分自身が変わったことを実感した。海外に行って広い世界の一部を見たのだ。その時、自分は井の中の蛙だったと気がついた。そして機会があればもう一度行きたいと考えていた。そこで本部派遣交換留学に応募したのだ。

2010年8月、私は二度目の北京大学留学に出発した。中国での新たな出会い、新鮮な環境に私は好奇心を煽られ毎日が楽しく、充実していた。そして日に日に自分の考え方が変わっていくのが実感できた。これこそ私が望んでいた大学生活だと思った。クラスには五ヶ国の友達がいたが、先生の教え方は上手で皆の中国語レベルはどんどん良くなっていった。勿論私も負けてはいられないと思い、日本ではした事の無かった予習、復習をして授業に臨んでいた。勉強することが苦にならない、この生活が楽しくって仕方が無かった。

私はオーストラリア人のルームメイトと半年間、同じ部屋で生活する事になった。彼との出会いはさらに私を刺激した。外見は普通の外人だが、一度喋ると何とも流暢な中国語を話すのだ。漢字の文化を持たない国からの留学生がこんなにも中国語を話すとは異和感たっぷりだった。しかし、この先入観はすぐに払拭された。彼のみならず世界中からの留学生たちは皆中国語を話してい

る。彼らは話すことが大好きなのだを知った。だから言語を覚えるのも早いのだと。そこで私も中国語に英語に喋りに喋りまくった。間違えてもかまわない、もともと日本人なのだから中国語や英語が話せなくて当たり前なのだ。彼らもそんな私の話を熱心に聞いてくれた。これによって私の英語のレベルも上がったと感じた。そして、彼らとの会話の中で気付かされる事も多く、それらは学校では学べない知識も多々ある。

後期では国際関係学院で本来の専門である国際関係について勉強した。ここで知った中国人学生たちの勉強に対する熱意、真剣さを目の当たりにし、自分が今まで怠けていた事を悔やんだ。しかし、ここで反省することができた事は良かったと思う。これから頑張らなくてはいけなと気付いたからだ。

よく中国は危険だというイメージを持っている人が多いのではないだろうか。そんな事はない。中国人はとても友好的で優しいのだ。留学中、彼らにもかなり助けられた。私は今後、日中間で活躍できる人を目指して頑張っていこうと思う。

最初は何となくから始まった留学によって、私は今後自分が何を目指し、どんな人間に成りたいのかが決まった。

最後に、きっかけは何でも良いからとりあえず行動してみよう。行動すれば失敗する時もある、だが行動しなければ成功する事はない。行動しなかった後悔は、行動した後悔よりも後悔する。という事をすべての人に言いたい。私はこれから自分の考えを信じて行動し、失敗を恐れずに生きていこうと思う。



クラスの皆とテスト後のお疲れ会

本部派遣

ストックホルム大学（スウェーデン）

留学期間：平成22年8月22日～平成23年6月13日

ストックホルムで学んだこと

国際交流学科 4年
大久保 和美

今回の留学を通して、多くのことを発見し、学ぶことができた。これらの発見は、留学をしなければ経験できなかったと思う。それだけストックホルムで過ごした日々は、素晴らしく、私の人生において貴重な経験になった。その中から特に印象に残っている2つについて詳しく書こうと思う。私は、ストックホルムに行く前に、2つの大きな目的を持っていた。その目的とは、教育について勉強するということと、私自身について考えるということである。そもそも、ストックホルム大学を留学先として選んだ理由は教育についてより勉強したいと考えていたので、教育関連の授業が充実していたからである。さらに、優れているといわれている北欧の教育を見て、感じてみたいと思っていたからである。それと同時に、日本とは全く文化や環境の異なるストックホルムで生活することで、私の価値観や物事の捉え方にどのような変化が現れるのか興味があった。

まず、教育に関して印象に残ったことを述べると、スウェーデンの教育は日本の教育と比較すると、自由だという印象を受けた。これは個人がどのような教育をいつ受けるかということを決め、その決定に対するサポートも充実しているからである。しかし、自由に決定できということは、その分、自らの決定に対する責任を負わなければならないが、スウェーデンでは、自己決定や自分の意思を表現する能力を養う教育を義務教育の段階から学んでいる。つまり、スウェーデンでは、すべての人が義務教育の段階から自分が具体的にどのような職業に就き、どのような生活を送るのかということを考えさせ、もし、途中でやり直したくなったら、新たな道を進めるように、教育機会の提供や金銭的なサポートを受けられるのである。この学校の在り方や教育そのものに対する考え方の違いは、私がスウェーデンで発見したものの中で特に大きなものであり、少し羨ましくも感じた。

もうひとつの目的であった私の中の変化を感じるということでは、私は日本人だということを再認識した。もちろん、外国人になろうなどと思っていたわけではないが、何をするにしても日本人としてのアイデンティ

ティーや判断基準が私の中に存在していることを実感したのだ。恋愛の仕方や家族との繋がり、挨拶の仕方など、当たり前で、感覚的に身につけていることが日本人独特であったり、他の文化とは異なっていたりするということを感じることができた。このように、他の文化に触れることで、新たな異なる価値観の存在に気付くとともに、私自身が何者で、どこに属しているのかということにより客観的に考えることができるようになったと思う。これは、自分とは異なる文化や価値観を持つ人々と接する機会を多く持てる留学の醍醐味であると思う。さらに、この留学の機会を得られたことに感謝するとともに、多くの人が留学等を通して、異文化と接する楽しみを味わえるように願っている。



友達のお別れパーティー



Slussen から臨んだストックホルムの旧市街 (Gamla stan)

モンタナ州立大学（アメリカ）

留学期間：平成23年1月6日～平成23年12月18日

成長と前進の一年

国際文化学科 3年
小林 由依

マイナス30度の気温を体感して、何十センチも積もった雪の上を歩いて、イエローストーン国立公園の吸い込まれるような大自然に圧倒されて…。私が留学していた1年間は私にとってとても大きく、振り返るとたくさんの思いが溢れてきます。ほぼ毎日、最低5時間机に向かってテストや課題にむけて勉強していました。文武両道のアメリカにいる学生に負けまいと勉強するときは必死に勉強し、空き時間はピアノを弾いたりジムへ行って運動をしたり、映画を観たりお買い物に行ったりと自分の生活リズムを作って過ごしました。モンタナ州立大学のあるボーズマン市の穏やかでゆっくりと時間が流れる様子や、譲り合いや助け合いが多く見られる人々の温かさは、私の留学中の心細い気持ちや不安を優しく和らげてくれました。想像していたよりも「一人」という壁は大きく、これまでにないほどの孤独感に追われました。大学そのもの、友達、環境、文化、言葉、生活等全てが一変し新しく始まりました。落ち込むことも多々あり、留学に来た目標を見失いそうになってしまう時もありました。その時は友人や家族からもらったメッセージを頼りに自分を励ましながら日々を過ごしました。そうしていく中で、自分と向き合う時間が増え日に日に自分が強くなっていくことを感じました。

イギリス、フランス、ドイツ、スペイン、バングラデシュ、スリランカ、インド、ネパール、タイ、韓国、中国、オーストラリア、アフリカ、メキシコ、ブラジル、コロンビアと他にも何十か国もの国から来ている人々に出会うことができ、友達になることができました。お互いの国の文化の違いについて話したり、アメリカの文化について話したりと1年という期間の中でこれほど多くの国際交流をはかることができたのは、アメリカの国柄のおかげだと思います。異文化理解や国際交流をしていくなかで日本人としてのアイデンティティや誇りを再認識することもできました。外に出ないとわからない日本人としての在り方や外国の人々の考え方、見方を知ることができそれらはとても興味深いものでした。アメリカだけでなく多くの他の国々から来た人たちと同じ大学で勉強で

きたことは特別なことで、その日々から得た知識や思い出は私の人生でこれから先けして消えることはないと思います。

1年間という長いようで短い期間でしたが、本当に毎日が新鮮で異なり、新しい出会いが常にありました。帰国した今悩んでいた日々が嘘のように留学した1年間のことを誇りに思います。どんな苦境にぶつかっても自分を見失わないこと、常に目標や意識を高くもっていること、辛い時間は必ず過ぎそれが強さに変わることなど留学を通して確実にこれらの力が身に付きました。この1年間はかけがえのない最高の1年間でした。

最後になりますが、私の留学は一人の留学ではありませんでした。ずっと支えてくれた家族、友達、そして国際教育センターのスタッフの皆様本当にありがとうございました。



国際交流フードバザー



教会の集まりにて

学部派遣

モンタナ大学（アメリカ）＜ISEP＞

留学期間：平成23年1月16日～平成23年12月27日

初めての海外そして1年間の留学

国際交流学科
伊藤 優史

私は、2011年1月上旬から12月下旬までの約1年間、アメリカのモンタナ州にある、モンタナ大学に留学しました。私が行った大学は、日本大学からの留学生が過去に少なく、情報が全くない本当に未知の大学でした。私にとっては初海外が初留学、そして1年間だったので、出発前は空港まで迎えに来てくれる人もいるかどうか分からないし、どうやってキャンパスまで行くのかも分からず、非常に不安でした。しかし考えても始まらないので、とにかく無事に着くことだけを考えて、本当に真っ白な気持ちで行きました。幸い、留学担当の人がいたので無事にキャンパスまで行けましたが、いなかったらと思うとどうなっていたか想像もつきません（ね・・・）。私が大事だと思うのはやはり、どこの国へ行くとときも、変な先入観や思い込みをなくして、楽しい経験も辛い経験もすべて吸収してやる、何が起ころうとも冷静になるぞ、という思い切った気持ちが大事なのかなと感じました。

私が選んだモンタナという場所はアメリカの北西部に位置し、カナダの国境にあるので、冬になれば非常に寒くなります。ある日はマイナス20度という極寒の時もありました。しかし私が留学をしたいと考えたときに、大きな都市はできるだけ避けようと考えていました。なぜならば、大きな都市では日本の文化が広がりすぎていて、アメリカのという国を正面から体験できないのではないかと考えたからです。モンタナ州は私の希望通り、日本の食べ物はおろか、日本の文化があまり知られていない場所でしたので、その中に身を置き、1年間という長い留学生活を無事に終えることができたのは、本当に自信になりました。

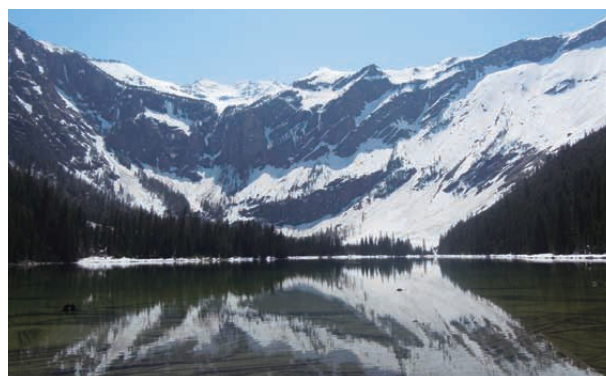
留学の魅力の一つとして私が挙げたいのは、英語力の向上や、日本では出来ない色々な経験ができる、ということもあるのですが、「世界各国の友達ができる。」ということも魅力だと思います。実はこれがアメリカという国を選んだ一つの理由なのですが、アメリカは人種をつぼと言われるほど多種多様な人種がいるので、私自身も様々なバックグラウンドを持った人たちと友達になることができました。今の私の目標は、アメリカでできた

たくさんの友達との付き合いを継続していくということです。彼らとこれからも長い付き合いをしていくために、また彼らに会うためにも、今の私の英語力をより磨いていきたいと思います。

留学というのは、行きたくてもなかなか勇気を出して行動するのは難しいことです。私自身も行くまでの数ヶ月間は正直、期待よりも不安の方が大きかったです。しかしこの一歩が踏み出せたからこそ今の自分がいるし、やって後悔よりやらないで後悔することの方が辛いはずです。留学前に明確な目標を立てるのも大事ですが、「行けばなんとかなる、やればなんとかなる」とポジティブに考えることが、留学だけではなく、全てに対して自分の100%を出すために必要なのだと思いました。



クリスマス・パーティにて



5月に行ったグレイシア国立公園

インディアナ州立大学(アメリカ) <ISEP>

留学期間：平成23年1月7日～平成23年12月19日

日本という“外国”

国際交流学科
植草 惇

2011年1月から私はインディアナ州立大学、Indiana State University(以下 ISU) に行ってきました。この大学はインディアナ州のテレ・ホートという町にある総合大学です。アメリカの大学としては比較的規模の小さい大学ですが、国際関係学部と日大三島高校の敷地を足したくらいの広さではないでしょうか。

この大学には今までの提携校と違い、国際関係学部が新たに加盟した ISEP という留学機構を通して行きました。ですので、この大学に行くのは私が最初だったため、どのような大学かあまり情報がありませんでした。正直なところ不安でした。というのも、他のアメリカの大学に留学していた先輩から「人種差別とは言わないけど、そういうようなこともあるよ」と聞いていたからです。これはどこの国の大学でも言えることなのかも知れませんが、実際に行ってみないことにはそれはわかりません。

結論から言ってしまうと、これは余計な心配でした。少なくとも私はですが、そう言った偏見のようなものには会いませんでした。そういった土地柄なのか、または ISU は付属の語学学校があり、留学生が多いためかもしれません。中国、韓国、あとは中東圏（私の友人はサウジアラビア出身でした）からの留学生が多かったと思います。日本人はあまりいませんでした。偏見とは違いますが、アメリカの学生に「東京ではスポーツカーが街をドリフトしてるってホント？」と聞かれたことがあります。見たことないね、と言うと「やっぱり映画は信用しちゃうダメだな」と言っていました。日本のイメージはスシ、フジヤマ、ゲイシャ、ニンジャだけではないようです。

海外で生活するのは自身初めてのことでしたので、生活面の不安もあることながら、やはり英語力、特にリスニングとスピーキングへの心配がありました。実際、授業は大まかな内容は聞きとることができるものの、早口で話されたり、細かいニュアンスを理解するにはかなり苦労しました。

また、学生との会話も大変だった点であります。と言いますのも人によって早口であったり、スラングや口語表現が多いため、意味が分からないことが多々ありまし

た。また、ネイティブスピーカーが話すような表現やテンポで会話するには、まだまだ勉強と練習が必要に感じます。

アメリカで生活していて、日本を海外の一国として見る機会や、自分は日本人なのだと自覚させられることが多々ありました。私は ISU で合気道クラブとアニメーションクラブに行っていました。どちらも日本の文化と呼べるものですが、日本と言う“外国”の文化がアメリカで浸透していることに、一人の日本人として不思議にも、誇らしくも感じました。ちょっとしたことですが、会釈の習慣が出てしまうことにも日本人としての自覚を感じました。

今回の留学を通して、短い期間ながらも勉強に限らず日本で生活しているとなかなか気付かなかったり、考えないことを発見することができました。この経験を今後の人生に活かせたらと思います。



友人とバスケの試合観戦にて



ISEP 留学生の集合写真

ストーニーブルック大学(アメリカ)

Fall 2011

My Experience In Mishima, Japan

Steven Nicholas Gerogianis

My time in Mishima, Shizuoka, Japan was truly valuable and I will never forget it. I had a really great time here and met so many wonderful people. At the moment, before I depart, I reflect on all the things I did. I put together a birthday party for a really good friend. I celebrated peoples birthdays with other exchange students by taking them out to dinner. I bought a bicycle and tried to assimilate into Japanese culture and I would go to the Onsen "Gokurakuyu" every week if I could. Almost every day in my apartment I would cook rice and put a piece of fish on top of it, or I would make Ramen and chop up Cabbage to put into it. The cabbage helped to absorb the spicy pepper powder that I would so often put into the ramen while it cooked. Every day I would study Japanese for at least two hours, but even so the final exam I had in Japanese was difficult. Even more things have I done, but I should discuss another topic: The Japanese way of helping others.

My Japanese teacher really cared about me and helped me at any chance that she could. She took me to the library and helped me get my Library card. She gave our class separate printouts in order to help us better understand Japanese Grammar. Likewise the CIELD office had great patience with me and really put the effort to help me out, and even introduced me to the Greek Ambassador to Japan, which was a great honor. Another teacher set up a group excursion to Nirayama, a neighboring town. This allowed us the opportunity to make Mochi. Everyone went above and beyond to ensure that I had an enjoyable time here.

Another wonderful experience I had was the

time I went to Ishinomaki to volunteer for the victims of the Tsunami that hit there March 11, 2011. Though I only spent three days there, it made a big impression on me, more than I can ever forget. And finally, I fell in love. It doesn't matter with who, names are not important, what is important was that I really connected with someone here in a special way that I have not connected with in many years. It is a sad thing that I am to leave Japan but it is my time to go, and I will never forget the kindness and the experiences that I had here in Mishima. My aim is to enter a Japanese graduate school, and because of this experience, I believe I can fulfill that dream. I wish everyone remaining in Japan the best of luck, and hope they can understand how valuable it was seeing Mishima Taisha and Mount Fuji every day. I recommend this location to anyone looking to enrich their lives with friendly people and caring people who are interested in your well-being.



Me & Friends Celebrating 留学生 Birthday

カトリック大学（韓国）

留学期間：平成23年9月21日～平成24年2月7日

『何一つも無駄じゃない、留学生活』

尹慧智(ユンヘジ)

私が始めて日大に来たのは2010年の9月、2年前のまだ暑い秋だった。韓国のカトリック大学で日本大学ブリッジプログラムに申し込んでこの学校での留学を決めた。ブリッジプログラムは最初の一学期間は語学研修生として日本語の授業だけを受け、日本語の先生に認められたら次の学期に交換留学生として普通の授業を受けられる、少し変わっているプログラムであった。語学研修と交換留学生と一緒にできるというところがとても魅力的だと思って、私はこのプログラムに参加した。振り返ってみると、このプログラムに参加し、この学校に来て本当に良かったと思う。言葉で全部言えないほどたくさんのことを教えてもらった。

まず、絶対忘れられないことのひとつが地震の経験だ。韓国で地震はかなり珍しいことだし、私は一回も地震を感じたことがないので、日本で始めて地震ということを経験して、とても驚いて怖かった。テレビですっと流れている残酷な津波の映像を見るのはとても辛かった。まるで映画の中でだけ存在すると思った世界が、目の前に広がっている感じだった。結局私は日大側の配慮で、一旦韓国に帰って2011年の9月また日大に戻って留学を続けることにした。地震はもう二度としたくない経験だし見たくない光景だが、悪い記憶だけではないと思う。韓国の家族や友人達から沢山の連絡が来て、皆本当に心配してくれた。日本人の友達も、怖がっている私のためずっと一緒にいてくれたり、ビックリした私を安心させるためメールを送ってくれたりした。周りの人々のありがたさを、改めて実感した瞬間だった。

次に、留学生活では遊びも勉強になれるということが分かった。日本に来る時考えたことのひとつが、出来れば同じ国の人とずっと交わっているより、日本人の友達と沢山会って親友になろうということだった。結論から言うと大成功だと思う。今の私にはとても大切な日本人の友達がいるし、その友達と遊んでいるうち私の日本語は上手くなった。日本人の友達との楽しかったおしゃべりが、私の日本語の勉強になったわけだ。伸びたのは日本語だけではない。他の国の留学生との交流によって英語

も前よりは話せるようになった。

日本に来る前、先輩から「留学生生活をしている時が、人生の中で一番楽しい時だと言われたことがある。留学生生活を取りまとめる今、考えてみると正にそのとおりだと思う。国境を越えた友情を感じ、何でも楽しかったし、何も無駄じゃなかった私の日大での留学を私は絶対忘れられない。そして輝いた青春の思い出として心の中にずっと残っているだろう。



2011年学園祭



語学研修クラスの友達との箱根旅行

ロヨラ大学(アメリカ) <ISEP>

Spring 2011

Study Abroad near Mt.Fuji

Andrew Vo

Being able to have another chance at studying abroad in Japan was a great honor. When I first decided to study abroad, I felt that one semester would have been enough experience for me to study and experience a different culture. I was wrong. Nearing the end of my first semester, I felt that I have not experienced enough of Japanese culture. I was always around other English speaking exchange students and was not exposed enough to everyday Japanese culture. From that, I decided to go see if I was able to stay for one more semester. Luckily, I was able to, and this time I was placed in a more country side of Japan, which was such a surprise to me. In order for me to go to a city with tall skyscrapers, I would have to travel at least two hours. However, from my dorm room I was able to view Mt. Fuji, a very spectacular sight when waking up in the morning and walking to school. The sight of Mt. Fuji on the way to school never failed to put me to peace, unless Mt. Fuji was covered by clouds. I am glad that I decided to join the English Speaking Society (ESS) where I made many Japanese friends that were interested in learning about my culture and sharing culture in return. I made many wonderful memories with these students, and I will never forget them. I believe that I matured a great deal ever since I came to Japan. Before I came to Japan, my life was very dependent on my parents. Now, I am able to depend on myself and the things that I have to do. Coming and living in Japan, I have learned from many mistakes that I made. I was able to obtain great understand of Japanese culture, language, and politics through my time in Japan. If one does not put effort into

immersing oneself into another culture, then they will never be able to fully understand that culture, or any other culture.



Farewell Party



Me at Mishima Grand Shrine

セント・ノーバート・カレッジ(アメリカ)

留学期間：平成22年8月26日～平成23年3月13日

～濃かった半年間の留学～

国際ビジネス情報学科 4年
水村 純

留学を振り返ってみると、あの半年間はこれまでの人生で経験したことがないくらい、勉強に遊びにと、とてもパワフルに活動し濃い半年間でした。その中で私は、人とのコミュニケーションの大切さ、自分の目標のために努力し続けることの大切さについて肌身をもって学びました。

正直言って私は留学に行く前、高をくくっていた。日本である程度英語の勉強をしてきたのだから、アメリカでも自分の英語は通じるだろうと。しかし、それは大きな間違いだった。いざ学校が始まってみると、英語が聞けない、しゃべれない、そして書けないということに気づいて呆然としてしまった。その時いかに日本で実用的でない英語を学んでいたのかを強く感じた。それ以降、まず英語力を外国人やアメリカ人とスムーズに意思疎通ができるぐらいまでアップすることを留学の目的とし、がむしゃらに勉強しまくった。しかし、3か月近くたっても全く自分の英語力が向上している実感がなかった。完璧にスランプに陥っていたのだ。また、授業の宿題とゼミの課題の両方をこなさなくてはならず、精神的につらい時期が何度もあった。私の場合最初は日本人をさけるべく英語しか使わない環境を作っていたので余計しんどかった。

ある日私が図書館で勉強していた時、ルームメイトだったグレッグと友人のジョセフが目の前に現れ一言告げた。“Take it easy. Don't work too much!”そしてその言葉と一緒に、大量のお菓子をくれた。私は彼らの優しさを肌で感じ思わず泣いてしまった。その時自分のことを本気で心配してくれる友人がいてくれることのありがたさ、そして勉強ばかりがすべてではなく、人とのコミュニケーションこそ一番大事なことでと学んだ。

この出来事以来私は勉強だけでなく積極的に人とのコミュニケーションをとるようになった。その中で韓国人、サウジアラビア、ベトナム、フランスなど様々な国の友人ができた。そしていつの間にか英語がある程度話せるようになると同時に、英語という共通言語を使うことでこんなにも宗教、文化が違う人々とコミュニケーション

できることの楽しさと素晴らしさを感じた。彼らは私にとってかけがえのない友人であり、彼らなしでは私の留学生活はまったく違ったものになっていただろう。本当に感謝しているし、いつか世界中を旅し友人たちに会うことが私の大きな夢です。その他にも本当に沢山の貴重な体験をこの留学では経験させてもらいました。そして留学を通じて英語は意思疎通がとれるぐらいまでは話せるようになりました。しかし、それ以上に辛かった時期を友人とともに乗り越えたことで本当に精神的にタフになったと思います。今私は就職活動をしていて、辛いことは多々ありますがそのたびに“留学の時あれだけ辛い経験したのだからこんなのどうってことない。”と自信を持てるようになりました。

最後になりますが、留学中支えてくださった国際教育センターの方々に心より感謝を申し上げます。



友人のグレッグとジョセフ



かけがえのない友人

セント・ノーバート・カレッジ(アメリカ)

留学期間：平成22年8月26日～平成23年3月13日

～ Amazing Memory at St. Norbert College ～

国際交流学科 4年
大塚 美奈

I'm Mina Otsuka. I'm 4th grade now. It was the first time I went to the United States. I went to Wisconsin where St. Norbert College last August. Since went to the United States, I had experienced so many things. This study abroad experience was so exciting and amazing. I made a lot of friends not only from America, but from all over the world.

Of course, talking with my friends was very useful for improving my speaking skills, and I learned about many cultural differences and religions. I had never thought about my religion seriously when I was in Japan. However, I had many chances to study religion while I was here. Every Thursday, I discussed Christianity at my friendship family house. Also, I often talked about Islam with my Saudi friends. When I had these discussions, I was a bit ashamed because I didn't know much about my religion, even though I am sure that I am a Buddhist. It was a good chance to think about my culture. I should have studied more about Japanese culture and religion.

I was also surprised by football. I didn't know that football is so important in the United States. At first I was not interested in football at all. In Japan, soccer is much more popular than football. So, I didn't know that Green Bay has such a strong team. But I watched almost all the Packers' games this winter, because my friendship father really loves Packers, and now I am also a big fan of the Packers. Of course I bought Packers T-shirts and sweat shirts after the Super Bowl.

I hope I can come back to the United States in the near future. I am starting to do some job-

hunting now. I hope I can get an international job because I think it will give me an opportunity to come back to the United States.

Last but not least, I want to say thank you very much to my family, teachers, tutors, friends, and friendship family: Brandon and Carrie.



Thanks giving dayのパーティー(本人、右)



collegeでのバスケ仲間と

ゴア大学(インド)

留学期間：平成22年9月17日～平成23年2月26日

～インドで思ったこと～

国際文化学科 3年
草刈 大空

今インドでの半年間を振り返ると、人との出会いに恵まれた半年間だったと思う。

飛行機でインドに降り立ってから、目の前に広がる未知の国に最初は戸惑いがあった。そして多くのインド人と出会うにつれて、その戸惑いは不安に変わった。日本人にはない、大雑把な性格、そしておせっかいなほどの干涉。これから上手くやっていけるのか、不安でどうしようもなかった。そんな不安は、学校の先生や生徒と話していく中で少しずつ変わっていった。インド人の行動の裏には常に優しさがあることに気づけたからだ。そして何よりもどこかでまだ未開のインド、そんな偏見で素直に人と向き合っていなかった自分自身に気づいたからだ。そこからの彼らとの交流は、何にも代え難い素晴らしい時間だったと思う。何のために勉強するのか、なぜ宗教がこれほどまでに生活に影響を与えているのか、カースト制による身分差や豪華な家で裕福な暮らしをする人と街で物乞いをする親子の混在する貧困差、様々なことを私と同年代の生徒と語りあったり、先生の授業の中で学んだ。知れば知るほどにインド人が好きになっていった。人間はお互いをちゃんと知れば、分かりあえるということを身をもって感じた。

その中でも特に印象的だった出来事がいくつかある。私は諸事情でプログラム半ばで一度帰国している。帰国間際にコーディネーターの先生は私に「いつでも帰ってきて良いよ。いつ来ても迎える用意をしておくから。インドで君のことをいつも思っているよ」と言ってくれた。私はこれほどに、人の優しさを感じたことはこれまでになかった。そしてこの言葉があ那时的私を支えてくれたのだ。また、ゲストハウスで働く人の家に招待された日のこと。家は粗末で家電もない家に案内された。それでもその家族は笑顔がたえなかったし、家族仲よく暮らしていたのが印象的だった。子どもが小さい時の写真を嬉しそうに私に見せてくれた彼はとても幸せそうだった。今まで私は人並みの暮らしとかそういうことばかりにとらわれていたことに気づいた。本当の幸せは財力や地位からくるものではないということを彼が教え

てくれたのだ。

このインドでの人との出会いは私を大きく変えたと思う。肌の色の違いも言語の違いも宗教感の違いも個性でしかなくて、同じ人間であるということ。人の間に国境は関係ないということ。そしていつでも、人は人に支えられて生きているということ。当たり前かもしれないけれど、その言葉の真意を身をもってインドで感じる事ができた。この半年間を私は絶対に忘れることはないと思うし、このおかげで今の私がいるのだと強く思う。インドでの半年間で大学卒業後の進路希望も大きく変わった。これからは雑念に左右されずに、自分が本当にやりたいことに向かって真っすぐに歩いていこうと思う。最後にこの貴重な機会を与えてくださった皆様に心からお礼を申し上げます。



現地で出会った友人と



市場の人々

ゴア大学(インド)

留学期間：平成22年9月17日～平成23年2月26日

～世界は広いと感じたインド留学～

国際交流学科 3年
森 満理奈

今回のインド留学は私の人生に革命をもたらした。この半年で私の世界観はとて大変化した。それは日本と西欧諸国ばかりに目が行っていた今までの狭い世界認識ではなく、アジア諸国や中東諸国などの異なる言語・文化・宗教などを持つ人々と実際に交流することで得た広い世界認識だ。見知らぬ国インドの地に足を踏み入れた半年間の生活は、私を成長させてくれた。何故ならインドでは今まで見たことも聞いたこともないことばかりで戸惑うことがよくあり、それによって考えさせられることが多かったからだ。インドで痛感したことの一つは、“貧困”。もちろん、日本でも新聞・書籍等々で知ることにはできる。しかし実際に貧困問題をかかえる国の人々から聞く話は現実味を帯びていたし、町を歩くと物乞いをする人々がたくさんいた。最初、私は思っていた以上にショックを受け、その人達を前にしてどうしたらいいのかわからず、立ち止まってしまった。さらには、その人達に無関心な(そう見えたが、そうではない。)地元の人々を見て、なんともやるせない気持ちにもなった。しかし、少し経つとそれがインドでは“日常”であることに気付く、日本がどれほど恵まれている国かということを改めて強く感じた。日本のような先進国ではなくインドのような新興国を見たことは、今後の私自身の国際社会への関わり方についてよく考え直すとても貴重な時間となった。より一層誰かのために働きたいと役に立ちたいという気持ちは強くなった。二つ目には、インドにおける“女性の地位”についての問題だ。現地での話、新聞、ジェンダーの授業などから女性が虐げられている事実を知って、心が壊れてしまうと感じたほど悲しい現実であり、同じ女性として恐れを感じる内容でもあった。日本でもジェンダーはよく取り上げられる社会問題の一つであるが、歴史の長いインドだからこその根深い原因などを知って、国が違うことで抱える問題点の差を感じた。ここから私が学んだことは、男女の在るべき理想の姿とはどういったものなのか。平等な男女の関係とは何か。等をもう一度考え、女性であることの幸せと一人の人間としての幸せについて真剣に追求してみることだった。三

つ目に、“宗教”。インドは宗教の国と言えるほど、宗教色が濃く、様々な宗教が共存している。私自身が無宗教であることと日本での宗教は儀式的であることもあり、正直宗教に対してあまり良い印象がなかった。しかしながらそれぞれの宗教を持つ人々と出会い、彼らの純粋な信仰心に触れることで、宗教に対するイメージはかなり変化した。また、メディアが報道する過激な思想の持ち主は極々少数でその他多くの信仰者たちにとっては自分たちの誤解をまねきかねない迷惑な存在である。つまりはきちんとその宗教の本質を見定めることが重要で安易な情報やイメージで自分の知識不足で偏見や誤解を持つことは危険であり、国際交流において非常に大切なことだと思った。今回の留学はとても有意義なものになりました。学べたことを将来に活かしたいです。



サリーの着方を教わりました



友人と昼食 - レストランにて

北京大学国際関係学院(中国)

留学期間：平成23年2月27日～平成23年7月1日

自分を成長させた中期留学

国際関係学科 3年
山本 龍太

僕が中国留学を希望した理由は、幼いころに父から「将来中国は、経済成長する。早いうちに中国語の勉強をしろ。」と言われていました。当時は全く興味関心がなく、更に中国に対して一方的に悪いイメージしか持たず自ら中国を遠ざけていた気がします。中国に行くまでは。

実際に中国に行って、不便に感じたことはたくさんあります。水道の水は飲めないし、トイレに紙は流せないし、列に並べば平気で横入りされるなどなど、日本では考えられないようなことがたくさんありました。でも慣れるしかないと思い生活していたら、気付かないうちに慣れていました。ここで感じたことは、どんな不便な状況でもそこに身を投じて慣れる努力が大事だということです。そしてこれはこれからの人生に活かしていきたいところでもあります。

僕たち日本大学の留学生は、韓国人留学生と一緒に授業を受けていました。そのなかで僕が感じたことは日本人と韓国人との英語能力、授業への積極性に大きな差があったことです。北京大学の授業では週に2回中国の政治、経済が英語での講義で行われていました。最初の授業で、日本人留学生は教室の後ろで固まって座り、韓国人留学生は前から詰めて座っていました。英語での授業にも着いて行っているようで、頷いたり、先生に積極的に質問をしたり、積極性と英語能力においての差は歴然でした。でも僕はこの状況が情けなかったし、授業の時間を無駄にしたいくは無かったので韓国人に混ざって前に座るように心掛けました。隣には日本語の分かる韓国人の友人に座ってもらい、授業の休み時間に分からなかったところを質問しました。その友人も快く手伝ってくれ、また他の韓国人留学生とのコミュニケーションもとれてとても充実したものとなりました。それは英語の授業だけでなく中国語の授業にも良い影響を与えました。最初は間違えるのが恥ずかしかったりしてなかなかしゃべることができなかったけれど、積極的に発表や、会話をすることもできて最後には中国語で冗談まで言えるようになりました。勉強に対する意識を変えて自分が成長しているのが分ると達成感や自信がついてきて、とても楽

しく勉強をすることができました。

この話に出てきた韓国人の友人は、一緒にサッカーをしたり募金活動をしたりして、僕にとっては中国でできた親友でした。彼は授業の最後に僕に向けて「一生友達でいたい。」と言ってくれました。僕は留学で多くの物を得ましたが、一生の友を得られたことが何より1番嬉しいです。彼とはインターネットを通じて今でも連絡を取り合っています。将来彼が日本に来た時に僕が日本を案内し、僕が韓国に行ったときは彼が僕を案内する約束もしました。もしこれから留学を考えている人がいたら、勉強も大事だとは思いますが海外で友達を作ることも大事だということを伝えたいです。一生の宝物になるはず



中山橋



上海の夜景

北京大学国際関係学院(中国)

留学期間：平成23年2月27日～平成23年7月1日

中国で学んだこと、感じたこと

国際交流学科 3年
加藤 瑞樹

約4カ月間の中国での留学生活は、私にとってとても貴重な経験となりました。言葉も通じず、日本とは違った環境の中で生活するということは、学校の授業では学べないたくさんのことを学べる良い機会だったと思います。

中国での生活は、環境の違いや食文化の違いから驚きや戸惑いはあったものの、思っていたよりも過ごしやすく、快適でした。現地では北京大学の寮で共同生活を送っていたのですが、一人一人の部屋にも鍵がかかるようになっており、プライベートの時間も十分に確保できました。しかし慣れない共同生活で、寮生活スタート時はストレスが溜まるなどの苦労もありましたが、その生活のリズムに慣れてしまえば友達と協力しながら楽しく過ごすことができ、これもひとつの良い経験となりました。

学校での授業は韓国からの留学生たちと一緒に、他国の生徒と一緒に授業を受けることはお互いにとって良い刺激となり、より一層勉強に励むことができました。授業自体はもちろんすべて中国語なので、最初はまったくついていけず焦りや不安が募る一方だったのですが、まったく聞きとれないという状況からのスタートだったので勉強すればするほどその分の成果が表れ、日に日に自分の中国語がレベルアップしていく様子を身をもって実感することができ、逆に意欲を途切らせることなく取り組みました。

授業の無い日は勉強も兼ねて積極的に観光などに行っていたのですが、授業で先生が私たちのレベルに合わせて話してくれる中国語とは違い、一般の人が話す中国語は話すスピードがとても速くてなかなか聞きとれず、観光に行く度に自分の中国語の未熟さを実感させられ、これも勉強への意欲のひとつの原因となりました。また、北京の街を観光している中で衝撃を受けたのは、目に付いて見える格差社会の現実でした。知識として、中国の格差の激しさはわかっていたつもりでしたが、実際に自分の目で現実を目の当たりにするとあまりの衝撃で戸惑いを隠せませんでした。

そんな生活の中で、北京大学の学生たちと交流する機

会があり、その中で知り合った女の子と仲良くなってお互い連絡を取り合うなど、現地での友達も作れました。その子とは中国でも一緒に遊んだりしていて、私の中国語の上達とともにだんだんと距離も縮まり、同じ趣味を持っているということもあって今でも頻繁に連絡を取り合うほどの仲になりました。

今回の中国留学では、語学だけではなくたくさんのことを学びました。それはどれも実際に現地に足を運び、自分の目で見て、実感したからこそ得られる貴重な経験だったと思います。見知らぬ土地、見知らぬ人々、慣れない環境、慣れない言葉、そんな状況に身を置くことで改めて自分自身と向き合う良い機会にもなりました。楽しいことばかりではなく落ち込むことも多々ありましたが、すべて含めた上でとても良い経験ができました。中国に留学に行って本当によかったと思います。



北京大学



留学メンバー

Devon Intermediate School (ニュージーランド)

留学期間：平成23年2月7日～平成23年4月1日

～ Big Smile ～

国際関係学科 3年
田中 みさ

入学当初、なんとなく大学生のうちに一度は留学してみたいなぁと思い海外留学希望者ガイダンスに参加した私。そこで私は自分を大きく変えてくれたこのティーチングインターンシップに出会いました。キラキラした笑顔で体験談を語る先輩を見て、自分もこんな風になりたいなと思い、大学生活の最大目標としてティーチングインターンシップに参加することを掲げました。セレクションの時期はまさに自分との戦いでした。自分は失敗の連続なのに、他の仲間がどんどんレベルアップしていくのを見て何度もくじけそうになりました。しかし私は一度も諦めず、自分を信じて自分のやれる最大の努力をしました。そして派遣が決まってから実際に派遣されるまでの約3ヶ月間は、特に仲間のすばらしさを実感しました。毎日のように夜遅くまで学校に残り模擬授業をしてはアイデアを出し合って、まさに切磋琢磨しながら過ごしていました。

そんな毎日はまさに瞬き三回、あっという間に過ぎ、ついに2ヶ月間の私のインターンシップが始まりました！

ニュージーランドに派遣された私は、Devon Intermediate SchoolでYear7とYear8(10～12歳)の子どもたちに日本語、日本文化を教えました。到着した2日後にはいきなりのキャンプがあり、早口で一度に何人もしゃべりかけてくる生徒と一緒に、わけも分からず山奥へ連れて行かれ、これから2ヶ月どうなるのだろう…と不安になりました。しかしそんな私の不安を取り除いてくれたのは他でもない、生徒たちのBig Smileでした。「こんにちは」と挨拶をしてくれたり、私や日本についての質問をたくさんしてくれたり、私の英語がうまく伝わらないときも、嫌な顔ひとつせず、伝わるまで私の話を真剣に聞いてくれました。通常は午前中の1ブロックに算数やWritingの授業のアシスタント、次のブロックに日本語、日本文化の40分授業を3コマ、午後は授業計画やその他のアシスタントなどの他に、クラブを受け持つなど、たくさんのことに挑戦させていただきました。生徒は日本に対してとても興味をもっており、毎回の授業では積極的過ぎて教える側が圧倒されるくらい

でした。またホストファミリーをはじめとするたくさんの現地の方々との出会いも、私を大きく変えてくれました。大学生活の最大目標であったティーチングインターンシップですが、実際に派遣されて、人にもものを教えることの楽しさを実感し、派遣前はぼんやりとしか思い描いていなかった日本語教師になるという次の大きな目標を確実にすることが出来ました。担当の田中拓郎先生がいつもおっしゃるよう、この経験を過去の栄光にせず、次なる大きな目標への一歩として、これから残りの大学生活を過ごしていきます。

最後にこの一年間、支えてくれた友人、家族、先生方、そしてかけがえのない7人の仲間たちの存在があってこそこのティーチングインターンシップであったことは言うまでもありません。心から感謝しています。



ちぎり絵



Big Smile

ティーチング・インターンシップ

Discovery School of Lancaster (アメリカ合衆国)

留学期間：平成23年2月7日～平成23年3月30日

支えてくれる人がいたから。

国際文化学科 4年
佐々木 果結

「ようこそ、ノーレルー家へ」、この暖かい日本語を手にしたホストファミリーに迎えられ、私のティーチングインターンシップ (TIP) が始まった。TIP への不安というよりも、一人でサウスカロライナにたどり着けるかという不安があったのだが、その不安が一瞬にして、安心感と達成感に変わった。

私がインターンとして通ったのは、アメリカのサウスカロライナ州にある Discovery school である。各学年1クラスで構成され、また在籍数は1クラス18人という環境だ。しかしさすがはアメリカで、私にとっては、たった18人、されど18人であった。日本で練習してきたクラスマネージメントが彼らには通用せず、今までの自分を全否定されている気分になった。しかし、担当の先生に相談し、18人を2グループにわけ9人で授業を行う許可をもらい、私の行う授業は授業らしいものに日々成長していった。私が任せてもらっていた授業は、音楽、文化、図工そして外国語である。ほぼ毎日授業があるため大変ではあるが、充実していたし、達成感であふれていた。特に、初めは日本語とスペイン語の違いすら分かっていなかった2nd gradeの生徒が、「Hola!」ではなく「Ohayo!」と挨拶してくれた時や、発表会で蛙の歌を歌詞なしで歌えるようになっていた時は、今までに感じた事のない嬉しさと、達成感があった。

私のホストファミリーは、4人家族であった。両親ともに弁護士で、忙しい毎日を過ごしていた。それでも、子どもや私との時間を大切にしてくれ、週末はよく旅行に連れて行ってくれた。特に St. Patrick Day に行った Savannah は驚くほど素敵な街であった。また、私が大学で Civil War や Native American について勉強していると知ると、それについて語ってくれ、博物館にも連れていってくれた。ホストシスターの Emma は日本好きで、小学校に行くときは赤いランドセルを背負い、帰宅後はピカチューを片手に私と遊んでくれる。折り紙や忍者ごっこなどを通し、学校で疲れた私に元気をくれた。時には、私を守ってくれもした。学校の子が私の英語をからかうことがあると、恥ずかしがりやの Emma が彼

らを注意してくれるのだ。今思い出すだけで、嬉しくて涙が出る。

そして、3月11日に思わぬことが起きた。東日本大震災だ。実家が仙台にあることもあって本当に動揺したのだが、ホストファミリー、学校の先生と生徒、そして地域の人に支えられ、立ち直り、彼らの協力の下 Sendai fundraiser を行った。その結果、9300ドルもの金額を集めることができた。東日本大震災は本当に辛いものではあるが、私を支えてくれる人たちのありがたみを知ることができた。

私は TIP を通して理想の自分、「英語を使って何かできる人」に少し近づけた気がする。全ては、私の TIP に協力してくれた人々のおかげ、ということ胸に刻み、次の自分のステップに進んで行こうと思う。



The youngest best friends



With Kindergarten

西カトリック大学附属語学学校(フランス)

留学期間：平成23年2月10日～平成23年7月31日

I obtained it because of the France going abroad to study

国際文化学科 2年
今村 史佳

I studied abroad at the west catholic university located in France in this February. At the beginning, everything was so inconvenient to me because of the culture and the lifestyle which are different from those of Japan. I've been surprised by many things such as the routine of French people and towns, flow of the time, value. The most surprising thing is the way they act. They all are surprisingly friendly, when I have a trouble, they always help me and even think for the solution with me. "Very shocking" I would say, since this is very rare to happen in Japan. Shortly, my mind turned to very calm, and I could get used to the life in France.

To talk about their kindness, I must mention about the donation campaign for the big earthquake of Japan. When the earthquake struck, we wished to do something for people in our motherland, so we gathered some Japanese who are currently in France and looked for something we can do. We knew there aren't many we can do, but we couldn't just sit around with a sum in our mouth. This is how we started the donation campaign. Once it's started, the response was amazing. I used the word "amazing" which was exactly right, it was amazing. Many people paid attention to the campaign, and most of them donated and encouraged us. Some shops volunteered to set a donation box in their establishment, some strangers talked to us to say that they were worried about in the middle of the street. It was amazing. Yes, I must agree that the earthquake changed me. My point of view about my mother country "Japan", the way it exist to me, they all changed. Because I never got out of Japan,

I never thought of Japan from outside, as one country in the world.

6 months is short. Maybe long I don't know. But it was long enough to see the good things and bad things of France, of course those of Japan also, long enough to get my value influenced. When you study abroad, you don't only learn the language, but also polish your sense and your real self. When you study abroad, you don't only learn the language, but also polish your sense and your real self, I believe as I experienced. I understand it's hard to study abroad because of those paper works and the finances, but I strongly recommend you to do so before your student life ends. I want you to do so, experience, feel and be impressed. Because this 6 months has developed myself and will be the last thing I would forget.



La cours de Expression orale



東北大地震チャリティー

清華大学(中国)

留学期間：平成22年9月1日～平成23年7月31日

苦しさ100から楽しさ100にする留学

国際関係学科 3年
田中 剣吾

私の留学先は、北京市にある清華大学です。清華大学は北京市西北部に位置し隣には北京大学などの有名大学が多く集まる北京の大学街に位置しています。中国人に清華大学という名前を出せば知らない人はまずいません。北京大学と並び中国一を争う総合大学の1つです。現在の胡錦濤国家主席や次期国家主席とされる習近平国家副主席など中国のトップを次々排出する大学です。中国で最も広い392万㎡のキャンパスを有し、正門から校内の私の寮まで歩いて30分から40分ほどかかる広さです。

私費留学である私はもちろん1人で中国へ行きます。頼れるものは大学に入学し1年半ほど学習した挨拶程度の中国語と絶対目的地に行くという気合だけです。ちなみに中国で英語は全く通じません。1年半の中国語の学習では通用するわけもなく、最初の10日程は苦しさ100。留学を楽しむなんて言葉はほんとに全くありませんでした。1日を生きていくので精一杯です。相手が何を言っているのかさっぱりわからないだけでなく、中国語の会話口調から自分が怒られているのかと思うこともしばしばです。

少し気分が晴れてきたのが授業が始まった頃でしょうか。はじめの半年は“初級班”で発音と日常会話からです。授業開始日、私を再度困難が襲います。クラスに日本人は私1人だったのです。「日本人なんていないほうがいい」と大きなことを言って日本を出発した私ですが、これまでの10日間で自信なんてどっかに飛んで行ってしまいました。クラスは変えようがありませんので、指定されたクラスへ行くと、アメリカ・イギリス・モンゴル・イタリア・インドネシア・カンボジアと国際色豊かな顔ぶれです。初級班はほとんど中国語を話せませんのでコミュニケーションにも苦労しますが、少しずつ学習するにつれて、クラスの友達とも会話が成立するようになります。そこまでいけばこっちのものです。あとは、一緒に食事に行ったり買い物に行ったりと授業で習った日常会話を使いまくるのみ。最初の半年は中国語の会話の基本を学びましたが、特に私が学んだことは、中国人や他の外国人との接し方です。

半年が経ち2月からは後期です。後期は“高級班”に入ることができました。高級班の顔ぶれは、香港・韓国・日本・マレーシア・英国とアジア圏が多くを占めます。高級班では、初級で学習した日常会話をもとにビジネス中国語や難しい文法、古代漢語など更にレベルの高い中国語の学習となりました。高級班でのクラスメイトたちは中国語で問題なく交流する事ができます。はじめ私は初級班とのレベルの差に圧倒されましたが、そのようなクラスの友達と過ごすにつれて私も日常的な会話で困ることはほぼなくなりました。最後は自分のクラスメイトといるのがとても楽しいと感じられるようになり、楽しさ100の中国生活にすることができました。留学は不安から始まるのは当たり前ですが、大切な事はどれだけ早く環境に慣れ、自分から進んで言語に向かっていく事が出来るかだと思います。中国はとても楽しいところですよ。



高級班クラスメイトと



清華大学のシンボル“二校門”(旧正門)

ハワイ大学(アメリカ)

留学期間：平成23年7月31日～平成23年8月17日

2011 UH Summer Seminar 体験記

専攻科食物栄養専攻1年 岩井 友紀, 食物栄養学科1年 佐藤 美咲・花崎 里紗,
商経学科1年 大井 葉月・杉山 実世, ビジネス情報学科2年 平田 智恵子, 国際交流学科3年 小菅 翔

この研修はホノルル市内ハワイ大学マノア校で約2週間開催された。研修では大学内で行う授業のほかにも、現地見学や調理実習がありました。多くのスタッフがサポートしてくださり大変貴重な体験ができました。

栄養学の授業では、体の仕組みや妊娠期の栄養、離乳、肥満、アレルギーの講義、日本のスーパーと何が異なっているか?などを確かめるという内容でした。学生たちは質問もできなかったりしたのですが、先生方が優しく丁寧に教えてくださり、徐々に『文法を間違えても大丈夫』『わからなければすぐに聞く』といったような雰囲気になり、新鮮な体験ができました。(岩井)

アメリカの食文化について、日本との違いについて学んだり、アメリカで有名なシェフと一緒に調理実習をしたりと数多くの事を学びました。2週間後の最後の授業では自分達が今まで学んできた事をグループに分かれて英語発表をしました。2週間ハワイで過ごしていくうちに少しずつ英語を理解できるようになりました。(佐藤)

現地の病院見学では、現場で働く日本人のRD(アメリカ管理栄養士)の方からのお話と厨房見学を行いました。現場で活躍する日本人のRDということで大変感銘を受けました。アメリカの病院のRDは日本の栄養士より更に専門的、医療的、且つビジネス的な資格であるように感じました。(花崎)

最も印象に残ったのはBob先生の英会話の授業でした。ボディランゲージを使った表現の英会話や海外の曲の穴埋めの授業は楽しく、私たち日本人は誰もが消極的になるものでも、自ら発表できるような工夫がされていました。この研修を受け、帰国してから前向きになることができ、視野が広がって新しい世界観を身につけることができました。人生は一度きりしかありません。多少のお金はかかるけれど、それだけの価値はあると思いました。(平田)

現地の高校で異文化交流を行うプログラムがありました。海外ではどのような形で日本語を習っているかを直に体験でき、折紙や歌でクラスの人と交流を深めました。一番印象に残ったのは、昼食の時に訪れたカフェテリア

での学生との交流でした。生徒達の日常的な一面を垣間見る事が出来、お互いの趣味の事を話して楽しい時間が過ごせました。(小菅)

ハワイアンレイの製作体験では、見た目と異なりとても難しい…と痛感しました。華やかなレイではなかったが、レイ製作を通じて異文化を学べたことはとても良かったと思いました。再度ハワイに行く機会があれば、また体験したいと思いました。(杉山)

歴史文化現地見学では、真珠湾やピショップミュージアムなどを見学しました。自身で歴史や文化に触れることで、文章で学ぶ以上に多くのことを感じることができました。短い期間でしたが日本を離れて海外で生活することにより、数多くの貴重な経験をすることができました。私にとって一生忘れることのできない、大切な時間となるでしょう。(大井)



ダイヤモンドヘッド山頂



ハワイアンレイの製作

短期海外研修

北京大学(中国)

留学期間：平成23年8月1日～平成23年8月31日

～ 1 か月の海外研修で得たもの～

国際教養学科 1年
佐藤 美乃理

私は、2011年8月1日から31日の1か月間、短期海外研修として北京大学国際関係学院で中国語を勉強してきました。このプログラムへの参加募集は5月が締め切りでした。ですので、大学に入学してはじめて中国語に出会ってからまだ1か月足らずでしたが、授業を通して中国への関心が高まり、もっと中国語でコミュニケーションをとれるようになりたい、中国文化を知りたいなど多くの思いが込み上げてきました。そして、この海外研修への参加を決意しました。

まず、北京大学での授業について説明します。月曜日から金曜日までは、毎日8時30分から11時30分の3時間北京大学の先生による授業を受けました。1クラス10人で構成されており、先生が目が一人一人に行きわたり非常に充実した授業を受けることができました。現地で教科書が配布され、単語練習、発音練習、会話練習、暗唱など様々な方法で授業が展開されました。先生は中国語と英語を用いて授業をするので、聞き取るのに大変苦労しましたが、慣れてくると少しずつ聞き取れるようになり、リスニング力の向上に役立ったと思います。また、通常の授業とは別に芸能や中国の現状に関する講義が行われる日もありました。授業が終わると食堂に行き、昼食を食べました。大学内は大変広く、多くの食堂やファーストフードのお店があり、毎日いろんな食堂に行きました。昼食後は滞在していたホテルに戻り、授業の復習や予習、宿題をしました。時間のある日にはホテル周辺を探検したり大学内で現地の学生とテニスをしたりと、アクティブに過ごし、中国語に触れる時間をなるべく多くするよう心がけていました。

休日は、万里の長城や天安門などの名所に行き、スケールの大きさに圧倒されました。また、京劇や雑技、琴の演奏など中国芸能を鑑賞した際には、その美しさや迫力に魅了され、ますます中国への関心が高まりました。現地に実際に行かなければ体験できない街や人々の雰囲気を感じることができ、非常に貴重な経験をするのができたと思います。そのほかにも、タクシーを使って北京の街へ行き買い物や観光をしに出かけたこともあり

ました。出かけた先では道を聞いたり、値段交渉をしたりと実際に中国語を話す機会が大変多く、相手に自分の中国語が通じたときは本当にうれしい気持ちになりました。ホテルに戻ったあと、休日に行った場所に関する感想を中国語でまとめ、平日の授業内では発表する時間が設けられました。

私は、海外研修を通して様々な視点から物事を見ることができるようになったと思います。語学以外にも多くのことを学びました。道路を走っている車は高級車が多く、また、街を歩いている時には物乞いをする人に声をかけられることもありました。経済格差を身をもって実感させられた瞬間でした。新しい発見がたくさんできまので皆さんもぜひ勇気を出して一歩踏み出してみてください。



夜の天安門にて



万里の長城

Western Institute of Technology at Taranaki(ニュージーランド)

留学期間：平成23年8月23日～平成23年9月18日

～ニュージーランド研修に参加して～

国際交流学科 2年
山村 有里絵

平成23年8月24日から約1カ月間、海外研修（ニュージーランド地域）に参加しました。月～金曜日の午前中は、三島市の姉妹都市であるニュープリマス市の WITT (Western Institute of Technology at Taranaki) にて、英語の授業を受けました。Ms. Thilani の授業は堅苦しいものではなく、日常的に使われる会話表現を中心に、ニュージーランド特有の表現や、先住民マオリの言語について学びました。

私達の滞在中に、ニュージーランドではラグビー・ワールドカップが開催され、街は非常に盛り上がっていました。私達は、街で開かれるオープニングセレモニーで現地の方々と一緒にマオリの歌を披露することになり、放課後に歌の練習をしました。多くの人前で、マオリ語と日本語の両方で歌うことができ、非常によい経験ができたと思います。

WITT には様々なコースがあり、現地学生との交流もありました。ホスピタリティ・コースの学生さんと一緒にニュージーランド料理と日本料理を作り、またマオリ・コースの学生さんとはお互いの国の歌を歌う機会がありました。彼らはニュージーランドの伝統的な踊りであるハカも披露してくれ、その迫力に私は圧倒されました。研修中、ウェリントンへの小旅行があり、国会議事堂や博物館等を巡ってニュージーランドの歴史に触れる機会も多くありました。

ニュージーランド研修では毎日、午後に様々なアクティビティがあり、毎日がとても濃いものでした。ラグビー・ワールドカップの開催年に行くことができ、現地で多くの人々に出会えたことは、私にとってかけがえのない財産となっています。

～ホストファミリーとの生活～

国際交流学科 2年
長谷部 泉美

私がお世話になったホストファミリーは母子家庭でした。日本では母子家庭という言葉に違和感があると思います。私も最初は不安でした。しかし、ニュージーランドではごく一般的なことらしく、ホストマザーは非常にパワフルでジョークが大好きな明るい人で、とても楽しく過ごすことができました。高校生のホストブラザーと年上のホストシスターと一緒に暮らしました。私はほぼ毎日、夕食の手伝いをしながらニュージーランド料理について様々なことを学びました。日本から持参した材料でカレーライスを作ったところ、みんな美味しそうに食べてくれました。

週末には、ホストマザーの実家を訪問したり、公園や小さな動物園に行って散歩をしたりと、充実した時間を過ごすことができました。また、地元のラグビーチームを応援に行ったり、週末の夜には家族全員でワールドカップの試合をテレビ観戦して盛り上がりました。ラグビーというスポーツがこんなにもニュージーランド人の生活に根付いていることに、改めて驚きました。

ホストとの生活は本当に充実していて、貴重な体験となりました。家にいる間、日本語はほとんど話しません。自分の気持ちが伝わらないことがあり、悔しいときもありましたが日が経つに連れて、自然に英語が出てきたことを実感しました。1ヶ月という短い期間でしたが、とても有意義な時間でした。もっと英語を勉強して、またホストに会いに行きたいと思っています。



WITT キャンパス内にて、現地世話人の方とともに

コロンビア・ノルテ大学ガルベス招へい教授来校

日本大学国際関係学部とコロンビア・ノルテ大学は在日コロンビア大使館の協力により2009年学術文化交流に関する覚書を締結した。この交流協定プログラムに基づきノルテ大学よりヘスス アルトゥーロ ガルベス バレガ教授（アジア・パシフィックの専門）が来校し、平成23年11月6日～11月19日の期間滞在し特別講義を行った。

表 特別講義の時間と内容（タイトル）

日 付	曜 日	授業時間	講 義 内 容
2011年11月7日	月	6	コロンビアから見た日本
2011年11月10日	木	3	世界の社会と文化の開発に関するラテンアメリカの提言
2011年11月11日	金	4	ラテンアメリカの経済発展問題
2011年11月14日	月	6	ノルテ大学のアジアと日本の研究について
2011年11月18日	金	4	コロンビアの外交政策

ガルベス教授のこれまでのアジア・パシフィックの研究を通して培った日本及び日本人の気質の知見を基に日本の経済及び産業の発展等について外国人（南米）から見た視点で講義が行われた。講義は表に示す講義内容を基盤として継続的に進められ、我々日本人の視点と異なる比較文化論的な内容があり、受講者の認識を新しい領域から深めた講義であったといえる。また、本人はキリスト教カソリックであり、異教の世界である中国、韓国の訪問で得た知見、今回は仏教の世界である日本を訪問することになり、研究の興味視点である異教の世界であるアジア諸国の様相を講義内容に織り込み講義が進められた。

講義内容は、南米から見た日本及びアジア地域の経済進展、コロンビアと日本の企業における連携の仕組みの違い（日本は下請け企業も技術開発などに参加しグループの総合力で生産を推進しているが、コロンビアは価格の決定と契約のみで共同で生産を行うことはない）、同教授のアジア地域（中国、韓国等）のこれまでの研究を踏まえ、日本政府の熱心な教育と企業による人材育成の根底には、礼節と教育を重んじる儒教の影響があると述べた。

日本を見た感想は、高い技術力と経済発展はこれまで得た知見の確認ができ素晴らしいと述べた。また、日本のどこの街角にも紙屑一つ落ちていない、綺麗な街であることに驚かされ、強く印象に残ったとのことであった。



ガルベス教授の講義風景



カルデナス駐日コロンビア大使と面談



ガルベス教授と日大生との懇親会

担当教授：日本大学国際関係学部
国際総合政策学科
福井 千鶴

～留学を終えた先輩方の一言～

☆留学して心から良かったと思える。もう一度行きたい。

☆英語だけでなく、アメリカの文化、生活、魅力を存分に味わうことができた。

☆得るものがたくさんあった。様々な価値観を持った人と交流できた。

☆友達も増え、考え方が変わった。

☆日本にいたら経験できないことをたくさん経験できた。

☆日本とは異なる世界、自立した考え方を持つ留学メンバーの中に身を置くことで、一回りも二回りも成長し、強くなることができたと思う。

☆日本では出会えないような人たちと関わることが多く、自分の視野が広がるチャンスになった。

☆中国語もリスニング、会話ももちろん上達したが、友達もたくさんでき、実際に行かないと見えない中国を沢山見ることができた。

☆今まで外国人の友達があまりいなく交流がなかったが、アメリカ人、ブラジル人、スイス人、韓国人、サモア人など沢山の国の人と中国語で交流できた。

☆いろいろな意味で精神的に強くなれたと思う。

☆人生の命題をみつけることができた。
留学経験は人生の財産。

☆インドの生活はなかなかできることではないので、吸収することが沢山あった。

☆日本とは全く違う世界に飛び込んだことで今まで見ることができなかったものを沢山見ることができる。

☆世界の現実とは日本で暮らしているのとは全く違うことを思い知らされた。

☆自分がどれだけ小さく無知であるかも知った。

☆普通の語学留学と違い、インドという国を自分の肌で感じることができ、英語だけではなく、たくさんのものを学び、吸収することができた。

(一部抜粋)



MEMO

日本大学 国際関係学部 留学ブログ

検 索

